

## 【東京】研究から起業まで「医師の多様性」体現した女医のキャリア-竹宮孝子・竹宮医院院長に聞く◆Vol.1

2022年9月30日（金）配信 m3.com地域版

祖父母から続く「竹宮医院」（練馬区）で院長を務める竹宮孝子氏は、「医師の多様性」を体現するようなユニークなキャリアを歩んできた。臨床、研究、教育だけでなく、女性医師の支援活動やクリニックの継承、さらに起業も経験。現在は開業医と産業医に加え、経営者としての顔も持つ。「自分の選択に後悔はありません」とほほ笑む竹宮氏に、これまでの歩みを聞いた。（2022年8月12日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——先生は臨床、研究、教育に携わり、クリニックの継承や起業も経験したと聞きます。まずは研究に携わった経緯をお聞かせください。

私が基礎研究に携わるようになったのは1997年のことです。1990年に東京女子医科大学を卒業し、同大の呼吸器内科に入局して研修医と大学院を修了した後、第一生理学教室の助手になりました。

「研究」に壁は感じませんでした。母は同大神経内科の教授を、父は筑波大学体育科学系の教授を務めた人でした。小さなころから両親の研究室に出入りしていたこともあり、研究者はむしろ身近な存在だったかもしれません。

実際にやってみると、自分に向いていると思いました。大学院では肺の弾性や睡眠時無呼吸症候群などの研究に取り組んだのですが、これがとても楽しかったのです。自分が想像したり考えたりしたことをさまざまな文献を参考にしつつ検証していく作業を面白く感じました。自分の興味のあることにこつこつと取り組むこと、「これを発見したのは私だけかもしれない…！」といった高揚を感じられること、そして、少しでも医学に貢献できる可能性が生まれることに喜びを感じました。



竹宮孝子氏（本人提供）

——大学院での臨床研究がきっかけだったんですね。基礎研究転向の背景には子育ても関係したそうです。

そうですね。私は大学院在学中の27歳で結婚し、すぐに妊娠して出産しました。当時は育休制度が始まったばかりで、周囲で取っている人はいません。女性医師は出産したら退職し、子育てが落ち着いてきたころにアルバイトとして復帰することが多かったのですが、私は仕事を続けました。それまでもいろいろなことを自分で乗り越えてきた感覚があったので、「なんとかなるだろう」と考えていたのです。しかし、臨床、研究、子育てを同時にこなす日々は想像以上に過酷でした。

「このままだと死んでしまうかも…」。そんな恐怖がこみ上げてきたのは体調悪化を繰り返すようになってからです。出産と子育て、ハードワークによって免疫力が落ちてしまったのでしょう。所属する呼吸器内科に感染症の患者さんが多かったこともあり、3カ月に1度は気管支炎などにかかるようになりました。仕事と仲間は好きでしたが、「これは続けられない」と思うようになり、「子育てと両立できる好きなことって何だろう」と考えた結果、基礎研究に携わることが浮かびました。

「臨床（研究）でこれだけ面白いのだから基礎であればもっと面白いのでは」と思いましたし、研究職は仕事をマネジメントしやすい特徴がありました。自分で課題を見つけて実験の計画を立てられるほか、学生への講義や実習も前もって準備できます。出産後も働きやすい環境でした。

#### ——先生は基礎研究に取り組みつつ、女性医師の支援活動も始めたと聞きます。

第一生理学教室に入ってから徐々に脳科学研究にシフトしていきました。当時は遺伝子組み換えマウスを使った研究が増え始めており、私も注目しました。研究対象の主流だったラットよりもマウスの体は小さく、およそ10分の1です。小さなマウスで実験することに抵抗を感じる人もいたようですが、新参者の私には良い意味で先入観がなく、積極的に挑戦できました。マウスの小さな脳に電極を刺す細かな作業などに難しさはありましたが、複数の論文にまとめることができました。

女性医師の支援活動を始めたのはそんな研究に取り組んでいたころです。1999年に男女共同参画社会基本法が施行されたことを受け、東京女子医科大学は医学部の中で先駆的に女性医師の支援を始めました。2006年に「女性医学生涯研鑽支援委員会」という理事長直下の組織が誕生し、学長や医学部長も参加しました。この委員会の実務を担うメンバーとして私に声がかかりました。

取り組んだのが、保育所の入所サポートです。自治体などが運営する認可保育所は区や市など運営母体の審査を経て入所者が決まります。その際、入所を希望する家族の状況を数値化し、その多寡が判断材料になっていたのですが、小さな子を持つ若い女性医師は弱い立場に陥る可能性がありました。

私が研修医だったころの給料は月に4万5000円ほどでした。一般的に大学からもらえる給料はとても少なく、多くの医師がアルバイトで賄っている状況。世間的にはパートのような立ち位置になりやすかったのです。そこで、「若い医師でもしっかりと仕事をしていますよ」と役所に示すため、支援対象である医師の勤務状況を可視化しました。外来や病棟、当直の勤務時間を人事課に数値化してもらって証明書として役所に提出し、審査に役立ててもらうようにしました。

#### ——先生はそのような経験を生かし、学童保育事業所の立ち上げにも関わったとか。

学童保育に関する取り組みは二つあります。一つは2009年ごろに都内のベンチャー企業と提携し、大学の近くに事業所を開設してもらったことです。開設に当たっては大学職員の子どもを数人、優先的に預かってもらうようにしました。

続いて行ったのが、この経験を生かした独自の学童立ち上げです。私はベンチャー運営の事業所に対して費用や利便性の面で改善点を感じていたため、学内で「理想的な学童保育」をテーマにアンケート調査を行ってデータを収集、それも活用して事業所を作りました。事務長を担ってくれる人を探して出資し、大学OGが持っている施設を安価に貸してもらいました。運用面では多忙な職員の状況を考慮して午前8時から午後10時ごろまでと預かり時間を広く取り、車を使った送迎サービスも行うようにしました。提供する食事は栄養バランスに配慮し、食材やカロリーの希望を現場に伝えました。

この会社は6年ほど運営しました。事務長夫婦が高齢になり現場で働きづらくなったことに加え、私も本業で忙しく、「これ以上は関われないな」と判断したのです。結果的に埼玉県の企業に事業売却して終えましたが、学童関連の活動は自分の子育ての経験が生きましたし、なにより私と同じように仕事と子育ての両立に悩む親御さんに役立ったことをうれしく思いました。

私は研究者としての仕事があったため、株主として資金提供しつつ裏方としてサポートしていたわけですが、食材の買い出しを手伝って子どもたちの誕生日にケーキをプレゼントしたり、イベントの一環として暑い夏の盛りに子どもたちと水鉄砲で一緒に遊んだりしたことは良い思い出です。

◆竹宮 孝子（たけみや・たかこ）氏

1990年東京女子医科大学卒。同大学院内科系を修了後、1997年に同大第一生理学教室助手。同大総合研究所施設長や看護学部基礎科学准教授を務めた後、2021年に退職。現在は祖父母から続く「竹宮医院」（練馬区）の院長や産業医、健康コンサルティングなどを行う株式会社Machiim（マチーム）の代表として活動する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

